

## 欲生釈

### 欲生

以上「信樂」について説いた。私はまだ、信樂について多くの問題を残しているが、後に至つて更に補足するであろう。続いて、至心、信樂、欲生我国の三心の最後、欲生について味読してゆく。

信巻欲生釈、本文に曰く、

「次に、欲生と言うは、則ち是れ如来諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。即ち真実の信樂を以て欲生の体と為るなり」と。

「欲生我國」の四文字を訓読する限り、「我が国に生れんと欲し」、又は「我が国に生れんと欲う」である。我国とは、如来の在す彼岸の浄土である。その理想の彼岸に欲生せよと宣うのである。されば文字の当面に拘泥する限り、欲生とは衆生の欲生心、願生心をさすのである。

しかるに聖人は、これを衆生の心意より奪つて、如来に帰し、「欲生と言ふは、則ち是れ如来、諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。」と解釈せられた。我らは如何に之を領解すべきであろうか。

### 勅命

憶うに、「欲生我国」の文字をただ表面的に解する限り、衆生が浄土に生れんと欲うことである。即ち衆生の彼岸への願生心そのものである。それである限り衆生の発一起すべき心意に外ならない。

しかるに聖人は全く如来の願意とし、その諸有の衆生を招喚したまう勅命とせられたのは何の意であろうか。

今もし欲生の文字を全く衆生の心意とするならば、信心の行者の浄土への往生は、衆生自力の心によつて欲生すべきであるとも考えられよう。もし浄土への欲生が自力によつて為されるものであるならば、やがて信心もまた自力によつて成就さるべきものとなるであろう。

ここにおいて「我が国に生れんと欲へ」との文字を更に仔細に凝現すれば、「衆生よ、我が国に生れんと欲へ」との文字の中には、正しく衆生に向かつて発したもう如来の深刻なる願意の動きを見ることが出来る。我が国とは、如来のいたもう如来の国である。その如来の国を我が国と言われるのである。浄土を我が国と言ひ、我が国に生れんと欲へとのみ言こそ、正しく如来の大悲の願の動きであることを知ることが出来る。まことに欲生我国とのみ言葉を中心としてうかがえば、如来の衆生に向かつて彼国に招喚したもうの勅命である。「浄土に向かつて来れ」との切なる大悲願心の動きである。

一切の草木は太陽に向かつて伸びてゆく。しかし草木が太陽に向かつて伸びてゆく前に、太陽こそ草木の上に来て、草木を育て、草木に向かつて「太陽へ太陽へと伸びよ」と招喚してはいないか。衆生は正しく浄土に向かつて願生しなくてはならない。しかし、衆生が浄土に向かつて欲生する前に、如来こそ衆生の上に来生して、

衆生に生き、彼岸より現実生死界に向かつて、必然の權威をもつて、招喚したもうのでなくてはならない。

我らは特に招喚の勅命と、勅命の文字を使われたことに意を留むべきである。如来の招喚は、唯なる通知ではない。御案内ではない。無上命令である。自然必然の力である。招喚の勅命である。衆生の思案計度を許されざる勅命である。自然必然の勅命なるが故に、よく衆生をして自力を離れしめ、よく自覚を成就するのである。けだし、欲生を以て衆生心とせず、如来招喚の勅命なりと断定せられたことは、祖聖独特の信境であり、解釈である。

この妙釈によつて、古来至心を以つて仏心の体、信樂を相、欲生を用となすもまた当然である。まことに正覚成就したまいし仏心の大用こそ欲生である。衆生は、この招喚の勅命によつてのみ救われて、浄土に往生するのである。

如来はまことに「諸有の衆生」そのものを招喚したもうのである。諸有とはこれを「あらゆる」と読めば、善悪、賢愚、男女、老少、貴賤、縑素、一切衆生の意であり、諸有の有に注意すれば、「有」は二十五有の迷界を意味し、六道生死界に迷惑流転せる衆生の意である。

如来はまことに、一切の有為の衆生悉くを招喚したもうのである。無為の菩薩を招喚したもうのでなく、有為生死に沈迷せる愚悪の凡夫を招喚したもうのである。涅槃経に曰く、

「又言わく。善男子、我が言う所の如し。『阿闍世の為に捏築に入らず。』是の如きの密義、汝、未だ解すること能はず。何を以ての故に、我が『為』と言うは、一切凡夫なり。『阿闍世』とは、普く及び一切の五逆を造る者なり。」

阿闍世の為に如来は涅槃に入らない。阿闍世とはただ単に王舎城の大王のことではなくて、五逆罪を造る一切凡夫のことである。即ち父に背き、母を泣かさしめし我のことである。

更に言く、

「又復、『為』とは、即ち是れ一切有為の衆生なり。我終に無為の衆生の為に世に住せず。何を以つての故に、夫れ無為は衆生に非ざるなり。『阿闍世』とは、即ち是れ煩惱等を具足せる者なり。」

如来の实在します意義は、ただ、有為煩惱の衆生あるが為である。無為は衆生ではない。弥陀大悲、諸有の衆生を招喚したまうもまた当然である。又言わく、

「又復『為』とは、即ち是れ仏性を見ざる衆生なり。若し仏性を見んものには、我、終に為に久しく世に住せず。何を以ての故に、仏性を見る者は衆生に非ざるなり。」

『阿闍世』とは即ち是れ、一切の未だ阿耨多羅三藐三菩提心を発さざる者なり」と。如来は、無仏性の衆生のために大悲を発したもうのである。されば如来は、この無仏性の闡提をこそ招喚したもうのである。しかるに涅槃経には続いて次の如く説かれる。

「又復『為』とは名づけて仏性と為す。『阿闍』は名づけて不生と為す。『世』とは怨に名づく。仏性を生ぜざるを以ての故に、則ち煩惱の怨生ず。煩惱の怨生ずるが故に、仏性を見ざるなり。煩惱を生ぜざるを以ての故に、則ち仏性を見る。仏性を見

るを以ての故に、則ち大般涅槃に安住することを得。是れを『不生』と名づく。是の故に名づけて『阿闍世』と為す。善男子、『阿闍世』は不生に名づく、『不生』は涅槃と名づく、『世』は世法に名づく。『為』は不汚に名づく。世の八法を以て汚さざる所なるが故に、無量無辺阿僧祇劫に、涅槃に入らずと。是の故に我、『阿闍世の為に無量億劫に涅槃に入らず』と言えり」と。

この仏説はまことに、前の五逆や無仏性を阿闍世と言われたのに対すれば、不可思議の説である。即ちこの後の説によれば、『阿闍』は不生と言う意、『世』とは怨ということ。一切衆生は煩惱を持つ、煩惱は怨を生ず。煩惱の怨を生ずるが故に、仏性がないのである。若し煩惱の怨を生ぜないならば、そこには仏性の輝きがあるのである。仏性あるものは、則ち大般涅槃に安住するのである。したがって阿闍世とは、不生怨で、怨を生ぜないといふこと。又阿闍は不生ということ、不生は涅槃に名ける。「世」は世法である。「為」は不汚ということ、世のあらゆるものに汚されないこと。涅槃の仏性はあらゆるものに汚されない。かくの如き、仏性を有する衆生を成就せんがために、我は「阿闍世の為に無量億劫に涅槃に入らず」と言うのであるとの意である。

以上の意を弥陀の願海において領解すれば、実に如来は諸有の衆生を招喚したものである。五逆謗法闍提の煩惱無仏性、難治難化の重患、悪衆生を正機として、招喚したまうのである。しかしながら永遠の無仏性のままにおかれるのではない。やがて涅槃経のいわゆる「無根の信心」を生ぜしめんが為である。如来廻向の大信心、信樂を成就せんがためである。信心即ち仏性である。まことに仏の弘誓は諸有の衆生を招喚して、直ちに浄土の眷属、正定聚不退の菩薩を成就せんがためである。

「欲生と言うは、則ち是れ、如来諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。」

欲生は衆生のおこす心ではない。衆生は煩惱より外、持たぬものである。その衆生の貪欲の手がのびてゆく所は浄土ではなく、三悪道である。自力とは畢竟、衆生の欲心我慢の動きである。この煩惱欲心の自力の手は、切り捨てられねばならない。これ聖人が、欲生を衆生の手より奪つて如来本願の勅命と、彼岸より現実生死への声とせられた所以である。現実の生死は、彼岸の浄土の声によつて否定せられなくてはならない。われらはこの彼岸よりの声によつてのみ、現実の煩惱生死を迷いと知り、自己心内の一切を顛倒の妄見と知り得るのである。平等なる大悲、悪人をこそこの大悲、怨親平等の智慧光、逆悪の衆生をことごとく一子と観じたまう仏心にふれて、如何に我らが、怨むべからざるに怨み、憎むべからざるに憎み、求むべからざるに求め、疑うべからざるに疑つているかを知らしめられて、ついに正しい信心に住し、念仏一行に乗托して正しく浄土へ欲生するのである。

銃の引金はかしこに引かれ、弾丸は来つて我にあるが如く、清浄真実なる如来心の全てが招喚の勅命となり、彼岸より発して現実生死の我を覚まし、我を救い、我を生かして、生死を後にして浄土へと往生せしめたものである。『安心決定抄』に曰く、「故に『安樂集』には『すでに他力の乗ずべき途あり、劣く自力にかかわりて、徒に火宅にあらんことを思はざれ』といへり。此のことまことなるかな、自力の僻思を

改めて他力を信ずる所を、『ゆめゆめ迷いを翻して本家に還れ』ともいい、『帰去来、魔境には止るべからず』とも釈するなり。」

とあり、彼岸よりの招喚が是の如き、衆生浄土への行歩を成就するのである。「我が国に生れんと欲え」との願心は、如実に衆生の上に成就するのである。

#### 欲生の体

「即ち真実の信樂を以て欲生の体とするなり。」

欲生の体を求められるのである。すでに欲生は大悲招喚の勅命である。その勅命のよつて出ざる根本の体がなくてはならない。それに答えて「真実の信樂」こそ、招喚の根源であることを示されたのである。如来正覚の一心こそは、円融無碍なる大信心海の成就であつた。この大信心海あればこそ、それより発る召喚の声である。衆生が仏勅に救われるのは、この信樂を体としておこる勅命なるが故である。勅命なくして信樂の意味はわからない。金剛の信樂なくしては勅命に絶対の權威と力はない。すでに欲生は、信樂を体となし、信樂は至心を体となし、至心は名号を体とすると説かれてあつた。名号は至心を、至心は信樂を、信樂は欲生の勅命を一貫成就して、ついに衆生はこの招喚の勅命一つによつて救われるのである。

#### 欲生即ち勅命

「我が国に生れんと欲へ」とは、如来大悲の願意を表わすものであつた。即ち、聖人は「欲生」の聖語の内面に盛られたる深き如来心にふれて、欲生とは「如来諸有の群生を招喚したもうの勅命なり。」と大胆なる明釈を施された。旅の子に「家郷に帰り来れ。」と命ずるは、子が帰り来るより先に親の呼ぶ声であり、大悲必然の無上命令である。次に、聖人は更にその意を徹底せしめんとして曰く、

「まことには、大小凡聖定散自力之廻向に非ず。故に不廻向と名づくるなり。然るに微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海にひよう没して、真実の廻向心無し。清浄の廻向心無し。是の故に如来一切苦悩の群生海を矜哀して、菩薩の行を行じたまいし時、三業の所修乃至一念一刹那も、廻向心を首と為して、大悲心を成就することを得たまえるが故に、利他真実の欲生心を以て、諸有海に廻施したまえり。欲生は即ち是れ廻向心なり。斯れ則ち大悲心なるが故に、疑蓋雜ることなし」と。

#### 不廻向

「誠に是れ、大小凡聖定散自力之廻向に非ず。故に不廻向と名づくるなり。」

先に幾度も述ぶるが如く、祖聖は「至心に信樂して我が国に生れんと欲え」との三心において、欲生心を以て「欲生」と言うは、則ち是れ如来諸有の群生を招喚したまうの勅命なり。」と釈せられた。もし欲生心をもつて、衆生の発起して浄土に向かう心意とするならば、他力本願の説は、説き難き問題に逢著するであろう。ここにおいて祖聖は、この欲生心を如来の願意にと返されたのである。即ちもしこれを衆生の発起すべき心意とする限り、衆生心それ自体の廻向に外ならない。衆生心を廻向して浄土に欲生せんとすれば、衆生の定散自力の心の廻向である。しかるに衆生の定善、散善

の心は清浄ならざるものであり、永續せざるものであり、疑いの雜れるものである。したがって彼岸への大船とはならぬものである。ここにおいて聖人は、

「誠に是れ大小凡聖定散自力之廻向に非ず。故に不廻向と名づくるなり。」

と、不廻向の説を出されたのである。欲生とは、断じて大小の聖人、凡夫等の定善散善の廻向ではない。故に衆生心を中心に考える限り不廻向である。衆生よりは何ものも廻向せざる心である。これ祖聖の深き宗教体験を現わせるものである。まことに不廻向の説は、深く如来大悲の願心に徹し、自己内面の深き凝視により、如来本願の外に何ものをも加うべきなく、又、彼岸へ運ぶ何ものをも持ち合わせざる、愚禿の信境における当然の帰結である。念仏行一つも、衆生より如来への廻向ではなくて如来の全ての廻向である。この不廻向の義こそ、一切の自力念仏に対する最後のとどめである。

『唯信抄文意』に曰く、

「然れば、大乘の聖人、小乗の聖人、善人悪人一切の凡夫、みなともに自力の智慧をもては大涅槃に至る事なければ、無礙光仏の御形は智慧の光にてまします故に、この如来の智願海にすすめ入れたまうなり」と。

聖人は、迷界における賢者、善人、智者等々になることを求めるより先に、その衷心の願求として、如何にして「大涅槃に至る」ことが出来るかを根本問題とせられた。この大涅槃に通ずる何ものをも持たぬ者、即ち有為の衆生である。何で大般涅槃の彼岸へさしむけ廻向すべきものを持ち合わせようや。されば次いで不廻向の理由を挙げて、次の如く説かれる。

「しかるに微塵界の有情、煩惱海に流転し、生死海にひよう没して、真実の廻向心無し。清浄の廻向心無し。」

まことに衆生の現実には「煩惱海」であり、「生死海」である。この生死煩惱の海に流転し、漂い、沈没せるもの即ち衆生である。衆生自体が出現せる無明生死の海に沈める衆生は、この海をその家となして、それ自体浮び出する何ものをも持たぬものである。即ち仏果菩提に廻向すべき「真実の廻向心」「清浄の廻向心」をば発起し得ざるものである。水に月に登るの性能なく、油に火を消すの功能なきが如く、煩惱の衆生は仏果菩提を成就すべき寸毫の功慧力を持たぬものとの自証こそ、最も正しい信心の智慧の領解である。しかも「道」は必ず開かれなくてはならない。

### 大悲廻向

「是の故に如来一切苦悩の群生海を衿哀して、菩薩の行を行じたまひし時、三業の所修乃至一念一利郡も、廻向心を首と為して、大悲心を成就することを得たまへるが故に、利他真実の欲生心を以て、諸有海に廻施したまへり。」

如来心は大悲心である。大悲心とは、限りなく恵まんとする心である。惜しみなく与えんとする心である。ここにおいて廻向の文字は、その立場を転じてしまった。如来の大悲は、長時永劫、身口意の三業ごとごとく、一念一利那といえども、唯これ廻向心を「首」と為して、大悲心を成就せられたのである。首とは首である。首をかけ

るとは、命をかけることである。為首とは、如来の生命は廻向にあるとの謂である。すでに論の意をとつて二門偈に曰く、

「云何が廻向する。心に作願したまいき。苦悩の一切衆生を捨てずして、廻向を首と為して大悲心を成就することを得たまふが故に、功德を施したまう」と。

如来の作願は、苦悩の衆生を捨てずして、無善造悪の衆生に無上の功德を廻向することを「首」となしたもうものである。されば衆生において一塵をも加えず、寸毫をも減ぜず、そのありのままなる現実に、如来の全てを廻向せられることによつて、救いと自覚は成就するのである。

### 欲生即廻向心

「欲生は即ち是れ廻向心なり。斯れ則ち大悲心なるが故に疑蓋雜ること無し。」

欲生とは、利他廻向の大悲心である。この祖聖の断定は、欲生心を、至心、信樂、欲生の三心において、ただ三心を平面的に並列せしめず、衆生の上に、往相又は還相、若しは行、若しは信、若しは証、かかる衆生成仏の因果全てを、衆生の上に廻向顕現したもう如来心の全てを、欲生の文字の上に発見したもうたのである。即ち、至心を如来心の体とすれば、信樂は、その相であり、欲生とは、その大用である。この如来大悲の大用によつて、衆生の上に大信心が成就せられるのである。即ち如来至純の至心、真実心は、欲生の勅命となり、欲生の廻向心となつて発動して、信樂を衆生の上に廻向したもうのである。

「我が国に生れんと欲え」との勅命が衆生の上に徹到し、如来の全てを廻向せられ6る時、はじめて衆生は与えられたる信力により、勅命に動かされて、彼国へ欲生するのである。これ則ちいわゆる「願生浄土」の心、又は善導大師の「清浄の願往生心」である。この願往生心こそ、信の内面に動く、衆生の全情意である。この衆生の發起する願往生心の全てが、如来大悲廻向の欲生心そのものである。故に、衆生の全情意は、そのまま如来心の全てであると、他方と言われるのである。

ここに於いて「疑蓋雜ること無し」と、欲生心の本質を示されたのである。この「疑蓋無雜」の文字こそ、廻向の如来心に疑いの蓋なきことを示して、やがて、三心即一、至心、信樂、欲生の三心を真実信心の一心に揚棄せんとの用意が含まれてある。

我らは、一点疑いなき如来の廻向心によつて念仏の衆生たり得るのである。如来心の廻向に徹して、衆生の世界より廻向の文字を奪い、特に不廻向の説を示したまひしことは、衆生の上に成就せられる信心の、至純清浄絶対なる他力本願そのままの廻向表現なることを示したもうものであり、衆生は自らが善根を彼岸へと廻向せんとしつつ、何時しかに転じて如来廻向の信に入り、衆生不廻向の義を領解するのである。欲生とは如来招喚の勅命であり、如来大悲の廻向心なりとの説は、祖聖独特の信海を顕彰せられたものである。

### 二種廻向

既に「欲生」とは、如来廻向心なることを聞いた。まことに如来久遠の真実は、一物すら所有しない無功德の衆生に、限りなく与えんとしたまう切なる大悲であつた。如

来の大慈悲は与えきらんとする。その限りなく衆生に廻向せんとする大悲を欲生と言うのであった。

然らば、如来は衆生に何を廻向せんとしたものであるか。この問いに答えんがために浄土論註を引かれる。曰く、

『浄土論（論註）』に曰く、云何が廻向したまえる、一切苦悩の衆生を捨てずして、心に常に作願すらく、廻向を首と為して、大悲心を成就することを得たまえるが故にとのたまへり。廻向に二種の相あり。一には往相、二には還相なり。往相とは、己が功德を以て一切衆生に廻施したまいて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまうなり。還相とは、彼土に生じ己りて、奢摩他、毘婆舍那方便成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向はしめたまうなり。若は往、若は還、皆衆生を抜きて生死海を渡せんが為にとのたまへり。是の故に『廻向を首と為して大悲心を成就することを得たまへるが故に』と言へり、と。己上」

以上の論の説こそは、我が聖人をして、真宗独特の世界を開拓せしめた極めて重要な聖教である。即ち廻向の宗教の樹立がそれである。何を廻向せられるのであるか。

曰く往相、還相がそれである。

往相とは、生死界より彼岸の浄土に生きて往くことであり、還相とは、彼岸より生死界に還来して衆生を濟度することである。しかして、その往相と還相とは、共に如来の衆生に対する廻向であるということである。故に論註に、「廻向に二種あり。一には往相、二には還相なり。」と言われるのである。

#### 往相廻向

更に往相を説いて、

「往相とは、己が功德を以て一切衆生に廻施したまいて、作願して共に彼の阿弥陀如来の安楽浄土に往生せしめたまうなり。」

といわれる。如来は如何にして衆生に往相を可能ならしめたまうのであるか。「己が功德を廻施したまう」のである。己が功德とは仏徳の全てである。されは祖聖はこれを和讃に、

「五濁悪世の有情の 選択本願信ずれば

不可称不可説不可思議の 功德は行者の身にみたり」

と嘆じ、これを受けて、蓮師は、

「斯様に弥陀をたのみ申す者には、不可称、不可説、不可思議の大功德を与えましますなり。不可称不可説不可思議の功德といふことは、数限もなき大功德のことなり。この大功德を一念に弥陀をたのみ申す我ら衆生に廻向しますます故に、過去未来現在の三世の業障一時に罪消えて、正定聚の位、また等正覚の位などに定まるものなり。」

と説かれた。しかしてかかる功德の廻施は、何によつてなされるのであるか。それは即ち、名体不二の名号、即ち大行によるのである。されば行巻に曰く、

「大行とは即ち無礙光如来の名を称するなり。斯の行は、即ち是れ、諸の善法を撰し、諸の徳本を具せり。極速円満す。真如一実の功德宝海なり。故に大行と名づく」と。

名号の廻向とは、大善、大功德、即ち絶対善の廻向である。この如来それ自体たる絶対善を廻施せられるが故に、衆生の上に大信を成就し、往相を成就するのである。

往相とは如来心の廻向によつて、彼岸への往生、即ち生きて往く歩み、必然の生活が成就することである。

往相不退の歩みのない信は真実ではない。

往相不退の生活のない行は真実ではない。

如来の慈悲といい、智慧というも、不退転に一道を歩ましめたもう如来の願力に外ならない。されば如来の慈悲を弄んで、人間の功利的な甘き毒酒の如き感傷の谷底に浸つて、長く彼岸への大道を水火の中に無礙に成就せられざるが如きも、鋭き智慧光によつて、我が現実の全てを否定せられるを怖れて、邪見我慢の黒闇に閉じこもるが如きも、真に如来の全てに値もつぬものである。彼岸の声に覚めるものは、必ず「作願して共に彼の阿弥陀如来の安樂浄土に往生」せんとする。かくせしめたもうを他力廻向と言ふのである。

重ねて言う。もし、行や信が、砂糖の甘きを求むる者、菓子を得て舌なめづつて、ただ感謝するというのが如きものであるならば、それはただ煩惱の満足であつて、他力廻向の清浄真実なる大信心ではない。即ち他力廻向の大行大信は必ず、作願、即ち願生心となつて、理想の彼岸に行歩往生する。

### 還相廻向

「還相とは、彼の土に生じ已りて、奢摩他、毘婆舍那、方便力成就することを得て、生死の稠林に廻入して、一切衆生を教化して、共に仏道に向はしめたまうなり。」

浄土に往生して大覚を成就することを、奢摩他（止）毘婆舍那（観）を成就するといふのである。今、ここではその詳説をさける。仏陀となるとは、やがて還相廻向に至ることである。身、涅槃の大寂を動ぜずして、生死稠密なる煩惱生死の菌林に神通遊戯して、衆生を度することである。還相の菩薩は何をするか。願作仏心を発し度衆生心を起し、念仏道を自ら成就しつつ、大菩提心によつて「一切衆生を教化して、共に仏道に向はしめたもうなり」と、如来の大慈悲を生死界に顕現するのである。往相が生死の現実から浄土への行歩であれば、還相は浄土から生死への大悲応化の活動である。

親鸞聖人は、聖徳太子の上に大悲観世音の示現の聖容を、法然上人の上に智慧光勢至菩薩の智行を、あるいは本仏弥陀来化の聖容を拝せられたのみならず、かの観經の会座に活躍せる、弥陀、釈迦はもちろん、悪逆提婆より、大臣、守門者（門番）に至るまでを、いわゆる十五聖者として、三経讚の前に列挙せられ、これら全てを、浄土教興起のために、生死界に還来せる応化の大聖として拝せられた。全てこれ還相の善知識である。しかも祖聖に、一点の還相意識なく、全く愚禿と観じ、地獄一定と深信して、本仏弥陀に合掌帰命して、弟子一人も持たずと、純粹に、往相一道を浄土に行



歩せられた。これ即ち浄土教の特質である。往相位に立つて、還相位の教主に会い、我もまた大覚成就して、無窮に還相廻向に生きる。これ祖聖の信境であった。されど、往還二廻向は、竹に木を接げるが如きものではなくて、南無阿弥陀仏の中に共に成就せられるのである。されば和讃に曰く、

「他力の信をえんひとは 仏恩報ぜんためにとて

如来二種の廻向を 十方にひとしくひろむべし」と。

されば、往相は還相をはらみ、還相は往相を摂して、一体なる南無阿弥陀仏を成就せられることによつて大信は成就するのである。されば、和讃に、

「弥陀の廻向成就して 往相還相ふたつなり

これらの廻向によりてこそ 心行ともにえしむなれ」

とあり、往還二相は二相であるまま、一名号の功德力なるが故に、往相も成立し、還相も成立するのである。一なるものが二相として廻向顕現するのである。

更にこの還相廻向の説に忘れることの出来ないことは、五念門の宗教において、還相廻向を出第五門と言われ、特に園林遊戯地門と呼ばれることである。

「出第五門とは、大慈悲を以て一切苦悩の衆生を觀察して、應化の身を示して、生死の園、煩惱の林の中に廻入して、神通に遊戯して教化地に至る。本願力の廻向を以ての故に、是れを、出第五門と名づく、と。己上」

人生は生死の園、煩惱の林である。還相の人は浄土より、この生死煩惱の園林に廻入して、大慈悲を以て、苦悩の衆生を教化するために、神通遊戯するといわれる。遊戯とは、任運無作にして、自在なるが故である。はからうことなき自然の相のまま、自在に自利他するの謂である。これは還相の菩薩の理想的な相ではあるが、我らは念仏往相の中にも、静かに味うべき世界である

更に聖人は一度は人生を生死に満てる遠離すべき世界とせられた。しかし生死界はそのままに人生の意味は転じられた。即ち、人生は一切の諸仏菩薩の悉く神通応化して遊戯したまう園林なるが故である。我らはこの園林においてこそ、聖なるものの意味をまことに領解し得るのである。人生は遠離すべき無明そのものであるままに、信心の智慧の明らけゆくところ、感謝すべき光の訪れ、如来の全ての輝きたまう園林遊戯地である。還相廻向の説の人生に於ける意味である。

### 因浄果浄

祖聖は、更にこの廻向論、即ち欲生釈に、論註の浄入願心章を引かれた。浄土の仏、菩薩、国土の三種莊嚴は、

「此の三種の成就是、願心の莊嚴したまへるなりと知る應しといへり。應知とは、此の三種の莊嚴成就是、本四十八願等の清浄願心之莊嚴したまう所なるに由りて、因浄なるが故に果浄なり、因無くして他の因の有るには非ざるなり、と知る應しとなり」と。

これ浄土建立の全てが清浄なる如来願心によつてなされてある。清浄なる仏心の具体的顕現が浄土である。浄土は、この真如法性そのままなる清浄願心による以外には生れないと説かれたものである。―この説は、人間が努力によつて、人生を尊く成就

しようとすることに、大きな反省と思惟とを与えられるものである。―更にこの説の反面を現わせば、衆生の無明煩惱によつては、浄土は出来ない。無明煩惱によつては、生死流転より外には生れない、といわれるのである。しかして我らの現実には、この煩惱より外無きものである。

しかるに還相の菩薩は、この清浄なる願心に成就されたいわゆる「因浄なるが故に果浄なり。因無くして他の因の有るには非ず、と知るべし」との、因果共に清浄なる浄土より、浄土ならぬ生死界に向かつて働きかけるのである。されば、現実人生の煩惱のただ中に、清浄なる応化身を示し、「生死の藪、煩惱の林の中に廻入して、神通遊戯して教化地に至る」ことが出来るのである。則ち還相生活の背景を示されたものである。

### 金剛心

更に次には善導大師の散善義の文が引かれる。曰く、

「又廻向発願して生るる者は、必ず、決定して真実心の中に廻向したまへる願を須いて、得生の想を作す。此の心深く信ぜること金剛の若くなるに由りて、一切の異見、異学、別解、別行の人等の為に、動乱破壊せられず。唯是れ決定して一心に投じて、正直に進んで、彼の人の語を聞くことを得ざれ。即ち、進退の心ありて、怯弱を生じ、廻顧すれば道に落ちて、即ち往生の大益を失するなり」と。

以上の文に於いて最も注意すべきは、「此の心深く信ずること金剛の若くなるに由りて」の文字である。即ち、一切の見解の異なる人（異見）、学問の仕方の異つた人（異学）、解釈の異つた人（別解）、行の異つた人（別行）等の人のために動かされず、乱されない金剛の信心は如何にして成就するのであるか。それが即ち「・・・生るる者は必ず、決定して真実心の中に廻向したまへる願を須いて、得生の想を作す」である。即ち如来廻向の真意が、金剛心の廻向成就にあることを示され、廻向の真実心によらない限り、金剛心の成就されないことを示されたものである。

まことに我らの現実には全くこの異見、異学、別解、別行の人の騒々しきで満ちている。その一一に肯いていたならば、煩惱動乱、船は何処に着くかわからない。故に「唯これ決定して、一心に投じて、正直に進んで、彼の人の語を聞くことを得ざれ。」、もしこれらの語に動かされて「即ち進退の心ありて」「怯弱」・・・弱いおじけ心を生じ、「廻顧」・・・わき見をしていたならば、道を失つて往生の大益を失するなり。まことに御親切なお言葉である。ただ、如来廻向の真実、人間のはからいの浅きを超えて、絶対なる涅槃の大寂より欲生したもう大信心に生きよとの思し召しである。

今、祖聖が、かくの如き引文をなしたもうは、欲生心をも、やがて信樂の中に摂めて、至心、信樂、欲生の三心即一の「金剛の真心」を出さんとせられる前提である。

### 本願力廻向の白道

如来久遠の真実は、ついに衆生に向つては、欲生、即ち廻向心となつて働きたもうのであった。弥陀大悲の本願は、究竟する所、その全てを衆生の上に発願廻向して、

往相還相を可能ならしめ、それを通して、如来の真実を大地の上に成就顕現せられることであつた。

しかして、かかる大悲廻向が衆生の現実に於いては、如何なる相として成就せられるのであるか。即ちそれが「此の心深く信ぜること、金剛の若くなるに由りて、一切の異見、異学、別解、別行人等の為に動乱破壊せられず」と、如来廻向の衆生における現実の相は「金剛心」の成就であつた。祖聖は今更に、この意を徹底せしめんとし、前に本巻に引かれたる二河白道の比喩の自釈を出して、回向の真意を明らかならしめられるのである。

曰く、

「真に知んぬ。二河の比喩の中に白道四五寸と言うは、白道とは、白之言は黒に對するなり。白は、即ち是れ選択摂取之白業、往相廻向之浄業なり、黒は、即ち是れ無明煩惱之黒業、二乘人天之雑善なり。道の言は、路に對せるなり。道は則ち是れ、本願一実之直道、大般涅槃無上之大道なり。路は、則ち是れ二乘三乘万善諸行之小路なり。四五寸と言ふは、衆生の四大五陰に喩ふるなり。能生清浄願心と言ふは、金剛の真心を獲得するなり。本願力廻向の大信心海なるが故に、破壊す可からず、之を金剛の如しと喩ふるなり」と。

#### 金剛不壞の真心

以上の二河譬の解釈の文を詳説すれば、我ら胸中に起つて暇なき貪愛の水、瞋憎の火の二河の中間に顕現する白道四五寸とは何を意味するのであるか。それを説かれるのである。

一、白道の白は、黒に對する言葉である。白とは善業、あるいは清浄業で即ち他力を示し、黒とは、悪業、即ち自力を現わされた文字である。

一、そこで「白は即ち是れ選択摂取之白業、往相廻向の浄業なり、黒は即ち是れ無明煩惱之黒業、二乘人天之雑善なり。」白の言は、如来因位の時、万行諸善中より、選択し摂取したまへる清浄真実なる善業であり、これは又、衆生の上に廻向して、衆生の浄土への往相を可能ならしめる清浄業である。故に白とは実に「本願の名号は正定の業なり」とあるが如く、南無阿弥陀仏の名号、即ち本願成就の大成を白業と言われたのであるとの釈である。

それに対して「黒」とは、黒業で、衆生の無明煩惱の黒業、即ち罪惡煩惱濁惡不善の無明業のことであり、又、二乘人天之雑善であるといわれる。二乘人天とは、人乗天乗の二乗のことであつて、乗とは、運載の義。五戒の教えによつて人間に、十善によつて天上の果報と言うが如く、人間教、天上教に乗つて各々の果報を得るが故に、二乗と云われるのであり、煩惱の毒素を雑えているが故に「二乘人天之雑善」といわれるのである。

一、次に「道」とは何であるか。これに答えて、「道は則ち是れ、本願一実の直道、大般涅槃無上の大道なり。路は則ち是れ、二乘三乘、万善諸行の小路なり」と。

この解釈によれば、道とは大道であり、路とは小路である。大道とは何ぞ、第十八願、絶体他力の大信心は「本願一実の直道」即ち、唯一真実なる横超他力の直道であつ

て「大般涅槃の大道」、即ち大般涅槃の仏果を証する唯一至上の大道である。以上の文字は皆、他力の大信心が仏果への大道たるを顕されたる言葉である。

それに対して「路」とは、二乗三乗、万善諸行の小路である。二乗とは前出の通りであり、三乗とは声聞、縁覚、菩薩の三乗、即ち自力聖道の万善万行をいうのである。これらは自力修行の路なるが故に小路といわれるのである。

以上、白と黒、道と路とを組み合せると、白道と、黒路である。人間の造つたものは小さい。人間の為したことに濁りがあり、毒がある。しかるに如来は、唯一絶対の真実であり、無限広大なる願力である。されば、本願成就の大信心は、一切を超えての清浄なる大道であり、自力の諸善は、滅ぶべき黒業であり、危き小路であつて、到底、涅槃の彼岸へ通ずるべき、真実にして広大なる白道ではない。

されば善導の「白道四五寸」とは、四五寸とは、四は地水火風の四大、五とは、色(物質)受(感覚)想(分別、価値判断)行(意志活動)識(それらを統一する心王)、この色受想行識の五陰のこと。つまり四大五陰とは、我らの精神及肉体の全てである。善導にあつては、白道四五寸とは、衆生の機相に現わされたる信心の当相を語るものであつたのが、この思い切つたる意釈によつて、白道は、どこに顕われるのであるか、衆生の四大五陰、即ち衆生の全身全霊の上に廻向成就されるのであることを説かれたものとなつたのである。まことに四大五陰こそは、これ全て煩惱ならぬはない。徹頭徹尾煩惱の黒業ならぬはない。火は炭の部分之火とせず、その全てが火となるが如く、衆生の全身全霊、煩惱ならぬはなきが故に、全身全霊六字となりたものである。されば『安心決定抄』に曰く、

「念佛三昧に於いて信心決定せん人は、身も南無阿弥陀仏、心も南無阿弥陀仏なりと思ふべきなり。人の身をば地水火風の四大寄り合ひて成ず。小乗には極微の所成といえり。身を極微に摧きて見るとも、報仏の功德の染まぬ所はあるべからず、されば機法一体の身も南無阿弥陀仏なり。心は煩惱、随煩惱等具足せり、刹那刹那に生滅す。心を刹那に千割りて見るとも弥陀の願行の遍ぜぬ所なければ、機法一体にして心も南無阿弥陀仏なり」と。

これ全く、凡夫の四大五陰、即ちその全身全霊が南無阿弥陀仏と仏凡一体に救われたる風光を現わせる大文字である。

善導は又、二河白道の開説において、白道を釈して「衆生貪瞋煩惱中、能生清浄願往生心」(衆生貪瞋煩惱の中、能く清浄の願往生心を生ず)と言われた。今、祖聖はこの「能生清浄願往生心」を更に釈して、「能生清浄願心というは、金剛の真心を獲得するなり。」と説かれた。清浄の願往生心こそは、具体的な衆生心の貪瞋煩惱中に能生する白道である。白道とは固定化された型でも無く、冷たき概念でもなく、実に具体的な衆生心そのものが発起する願往生心である。しかして、願往生心とは何か、「金剛の真心」そのものである。その金剛不壞の真心を獲得することこそ、浄土への白道に乗ずる相である。

聖人はさらに「本願力の回向の大信心海なるが故に、破壊すべからず、これを金剛の如しとたとふるなり。」と説かれる。衆生にあつては金剛の真心の獲得であり、如

来にあつては本願力の回向である。如来本願力回向の大信心海なるが故に、破壊すべからず、これを金剛の如しと、たとえられるのである。

#### 仏法難忻

聖人は更に善導大師の序分義を引かれる。曰く、

「観経義に、道俗時衆等各々無上心を発せども、生死甚だ厭ひ難く、仏法復忻ひ難し。共に金剛の志を発して横に四流を超越せよ。正しく金剛心を受け、一念に相應して後、果、涅槃を得ん者と云へり」と。

今時の僧侶及び在俗の者よ。各々無上菩提の心を発せども、自力の心である限り、修行成就して生死を出離することは困難である。何故なれば、生死を遠離し、仏果菩提を忻求する心すら、容易に発すことは出来ない。まして無上覚をやである。されば共に、他力金剛の真心を獲得して、一念の信力によつて、四流（四暴流のこと、欲暴流、有暴流、見暴流、無明暴流）即ち生死の流を断じて横超の直道に帰し、他力金剛の信心を獲得し、本願に相應すれば、浄土に到つて、大涅槃の仏果を得ることが出来るのである。

以上の説は、如来廻向の金剛心の如何に最勝にして甚深廣大なるかを示し、以て行者を勸信せられたるものである。更に曰く、

「又云く、真心徹到して苦の娑婆を厭い、楽の無為を忻うて、永く常樂に帰すべし。但、無為の境は軽爾として階うべからず、苦悩の娑婆は、輒然として離ることを得るに由なし。金剛の志を発すに非ずよりは、永く生死の元を絶たんや。若し親子慈尊に従いたてまつらば、何ぞ能く斯の長き歎を免れん」と。

五欲煩悩を生命とする凡夫にどうして厭うべき人生がある。離るべき生死がある。厭うべき生死なく、離るべき迷路の見えざる者に、苦悩の人生を厭い、浄土を願う心の発るうはずがない。如来本願力の廻向によつて、真心衆生の骨髓に徹到してのみ、初めて苦悩の娑婆を厭い、無為の常樂を願求するの志を生ずるのである。

涅槃無為の世界には、軽々しく階い上ることは出来ない。苦悩の娑婆は、もやすくたちまちに離れ得るものではない。軽爾として涅槃に階ひ得ず、輒然として生死を離れ得ぬ衆生は、本願他力廻向の金剛心を発さしめたもうに非ずば、永く生死の元を絶滅することは出来ない。まのあたり本仏慈尊の教勅に従わずんば、何でか、能く、この長き生死の歎きを免れることが出来よう。

聖善導の自証の告白、謹んで頂戴すべきである。善導大師にしてはじめて、厭離穢土、欣求浄土の志なき煩惱の正体を知り、軽々しく涅槃の彼岸に階進すること難く、生死之元の絶ち難きを知りたもうのである。本仏慈尊の教勅に、今日値うこと能はずば、この長き歎きを如何にして免るべきとは、まことにその衷心の歓喜称嘆の声である。

噫。誰かこの善導の喜びを知り、誰かこの善導の歎きを知る者ぞ。日本にその人あり、法然上人と言う。聖者法然にしてこれを知りたもう。やがて我が親鸞聖人亦、特に如来の勅命に信順し、その廻向の願心にふれて、金剛心を獲得し、善導の聖教によつて、その自証を述べたまうのである。

聖人は更に「定善義」の聖句を引ききたもう。曰く、  
「又云く、金剛と言うは、即ち是れ無漏の体なり」と。  
金剛とは有漏煩惱の体ではない。如来無漏清浄なる体そのものである。即ち南無阿弥陀仏より外に求むべき金剛心はあり得ないのである。されば、金剛とは衆生の悪機を思い固めたことでなく、柔軟に本願の勅命に合掌信順する時、本願の不思議は、名号自体に内在する金剛心を衆生に廻向して、救いを成就したもうのである。されば、衆生貪瞋煩惱中に発起する金剛心こそは、仏心それ自体の具体的顕現である。金剛心は、無漏の体なるが故に、仏道を成就するを得るのである。